

巻頭言一「器ならず」

大野 晃嗣 教授

東北大学日本学国際共同大学院

(International Graduate Program for Japanese Studies: GPJS)

プログラム長



『論語』為政篇に、「君子不器（君子は器ならず）」という短い言葉があります。幼い頃から論語に親しんだ渋沢栄一は、これを「箸には箸、筆には筆と夫々其器に従つた用があるのと同じやうに、凡人には唯それぞれ得意の一技一能があるのみで、万般に行き亘つたところの無いものである。然し、非凡な達識の人になると一技一能に秀れた器らしい所が無くなつてしまひ、將に將たる奥底の知れぬ大きな所」があることと解釈し、明治政府の財政のあり方を巡って自らと対立した大久保利通はそのような人物であったと回想しています（『実験論語処世談』「器ならざりし大久保利通」）。このような思想は、近世中国王朝で実施された官吏登用試験「科挙」において、細かな職業の適性や能力などは問わず、文学的な教養を基準として人徳を評価するという形に具現化し、社会構造を方向付けるにまで至りました。

支倉リーグの活動を進めていると、最近いつもこの言葉が思い浮かびます。それは、このネットワークの活動が、人文学・

社会科学の専門性や学問分野の細分化が抱える「一技一能」の問題に対して立ち向かっているからだけではありません。このネットワークが、形而下に孤立した、小さな「器」でしかない我々研究者や若い院生達にとって、お互いの背後にある、目に見えないものの考え方、感性、そして価値観について対話をし、切磋琢磨を続ける場となりつつあることを感じるからです。その時、「器ならず」という言葉からは、決まったサイズに収まらず、成長を続けるべきだという意味も感じとれるように思います。もちろん、一部の先生方をのぞけば、我々の多くは「君子」ではありませんし、この言葉が語り継がれている理由の一つは、そのような挑戦が容易に成し遂げがたいものであるかを示してもいましょう。しかし一方で、絶えず挑戦する価値のあるものであることを伝えているように思われるのです。

THE HASEKURA BULLETINの第四号をお送りします。成長を続けるネットワークの活動を是非ご一読ください。

ニュース

🔥 2023年後期 支倉リーグ参加大学30達成！

2023年度、支倉リーグにワルシャワ大学（ポーランド）とケンブリッジ大学（イギリス）が加わりました。

🔥 2024年3月26日 GPJSプログラム生2名が博士号取得

GPJSプログラム生から、鏡耀子さん（日本語学専攻）と増田友哉さん（日本思想史専攻）の2名の若き博士が誕生しました。

🔥 2024年3月 佐藤弘夫GPJS特任教授の退任

支倉リーグとGPJSの創設と発展に大きく貢献し、後進の支えであり続けた佐藤弘夫GPJS特任教授（東北大学名誉教授）が、このたび退任となります。2023年8月に宮城県丸森町を訪れたGPJS夏季研修では、佐藤教授ゆかりの小斎城を目指し道なき道を行きました。同12月の国際カンファランス（p.4）は、佐藤教授の講演を中心に構成されました。（木山幸子）



今後の予定

🔥 2024年4月3-5日

4th International Doctoral Symposium on Asian and African Studies（ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学、イタリア）

🔥 2024年4月18-19日

国際シンポジウム“Literature and Ecology”（グルノーブル・アルプ大学、フランス）

🔥 2025年6月 予定

第9回支倉シンポジウム（ブリティッシュ・コロンビア大学、カナダ）

テーマは“Embodied Discourse, Embodied Practice: The Body as Text, Medium, and Testimony in Asia”です。ローマでの成功（p.6）に続き北米、欧州、日本の研究者が終結し、支倉リーグをさらなる高みに引き上げます。（クリストファー・クレイグ）



イベント報告（2023年7月～2024年3月）

- 2023年8月1日（木）第14回支倉セミナー（東北大学）
「18世紀初期のフリーメーソン団体における秘密文化」
講師：ヘンリック・ボグダン（スウェーデン、ヨーテボリ大学教授）

- 2023年8月27日（火）～29日（木）GPJS夏季研修（宮城県仙南地区）

- 2023年10月24日（火）第15回支倉セミナー（東北大学）
「ケニアにおける日本語教育」
講師：ニエリ・カゲマ（東北大学大学院国際文化研究科博士後期課程/ケニア日本語教師会会長）、小森谷仁音（東北大学博士後期課程/GPJSプログラム生）

- 2023年11月8日（水）カーティン日本学開設記念ワークショップ（カーティン大学、オーストラリア）
「世界における日本：過去、現在、未来」(p.3)

- 2023年11月10日（金）日本学国際ワークショップ（ヤギェウォ大学、ポーランド）
「交叉する二つの『東』」(p.3)

- 2023年11月14日（火）ワルシャワ大学・東北大学日本学提携記念行事（ワルシャワ大学、ポーランド）
「ワルシャワ大学・東北大学日本学国際共同ワークショップ」(p.3)



- 2023年11月17日（金）第16回支倉セミナー（東北大学）
「地獄の使徒たち：サタニズムの歴史」
講師：ペール・ファクスネルド（スウェーデン、セーデルトーン大学准教授/東北大学客員准教授）



- 2023年11月30日（木）第17回支倉セミナー/第4回日本学国際研究クラスター研究会（東北大学）

「研究の共有地としての漱石文庫：近代文学における『所有』の再考」

講師：マイケル・ボーダッシュ（アメリカ、シカゴ大学教授）

- 2023年12月9日（土）・10日（日）第5回東北日本学国際カンファランス（東北大学）(p.3)

- 2024年1月25日（木）・26日（金）第8回支倉シンポジウム（ローマ大学ラ・サピエンツァ、イタリア）

「身体化された談話、身体化された実践：日本におけるテキスト、媒体、言明としての身体」(p.3)

- 2024年3月4日（月）第18回支倉セミナー（主催：第29回ナラティブ・メディア研究会）（東北大学）

「マンガを経験する：創作・解釈・視覚的模倣」

講師：ベルント・ジャクリーヌ（スウェーデン、ストックホルム大学教授）、李衣雲（台湾、国立政治大学教授）、竹内美帆（星槎道都大学専任講師）、カーロヴィチュ・ダルマ（横手市増田まんが美術館研究員）、コピローワ・オーリガ（東北大学助教）

- 2024年3月21日（木）2023年度東北大学GPJSシンポジウム（東北大学）

「中小企業と地域：過去と現在」

講師：曾根秀一（静岡文化芸術大学教授）、谷本雅之（東京大学教授）

- 2024年3月29日（金）第19回支倉セミナー（東北大学）

「『中世』の表象とその受容：日本とヨーロッパの諸例」

講師：黒岩卓（東北大学准教授/GPJS副プログラム長）、マリン・マッセンジオ＝デハロ（フランス、レンヌ第二大学博士後期課程）、クロエ・ベレック（東北大学専任講師）

イベントハイライト

カーティン日本学開設記念ワークショップ

「世界における日本：過去、現在、未来」

2023年11月8日（水）カーティン大学、オーストラリア

午前のセッション“Energy Transition and Critical Minerals”では東北大学から松八重一代教授（環境科学研究科）がオンラインで、午後のセッション“Japan and Australia in Global History”ではGPJSの教員（安達宏昭教授）とプログラム生（細井拓真、陳梓博）が現地で発表しました。学生の日本と世界の経済に関する発表は、初めての海外での英語による発表にもかかわらず落ち着いて内容も充実しており、参加者から賛辞の言葉が寄せられました。ワークショップ前後にはロレンツォ・マリヌッチ准教授も加わり、支倉リーグに加盟したカーティン大学人文社会科学系教員との交流を深めた1週間でした。（安達宏昭）



ヤギェウォ大学共同ワークショップ

「交叉する二つの『東』」

2023年11月10日（金）ヤギェウォ大学、ポーランド

植木俊哉教授（東北大学理事、法学研究科）ら東北大学GPJS教職員一行は、支倉リーグの主要拠点の1つであるヤギェウォ大学を訪れました。初日に副学長および国際文化研究科所長を表敬訪問し、2日目にワークショップが開催されました。木村敏明教授（東北大学文学研究科長）の基調講演“Natural Disaster and Religious Culture in Japan”では、災害を生き抜くために宗教が果たす役割について論じられました。その他、東北大学の教員（木山幸子准教授）とプログラム生（韓相允）、ヤギェウォ大学の教員（エヴァ・カミンスカ教授）と学生（ゾフィア・プラズツヒ氏、マルガリタ・サラン氏）の発表があり、多領域の聴衆との様々な質疑応答がありました。2022年に9月に東北大学創立115周年・総合大学100周年記念事業として開催された支倉サミットに登壇されたフランチシェク・チェコ教授との再会を果たすことができ、両校の国際日本学の交流を確固たるものとする機会になりました。（木山幸子）



ワルシャワ大学・東北大学日本学提携記念行事

「ワルシャワ大学・東北大学日本学国際ワークショップ」

2023年11月14日（火）ワルシャワ大学、ポーランド

大野英男東北大学総長がワルシャワ大学から名誉博士号を授与され、その式典に東北大学GPJS一行が参加しました。また今回の授与を記念して、スピントロニクス、国際法、日本学の三分野のワークショップが開催されました。日本学のワークショップではワルシャワ大学のアグネシカ・コズィラ教授、イヴォナ・コルジンスカナブロッツカ教授、ナヴロツカ・モニカ氏、ウルシュラ・宗宇・マハ氏の発表がありました。東北大学からは、クリストファー・クレイグ准教授による支倉リーグの紹介につづけて木村敏明教授、木山幸子准教授、韓相允さんの発表がありました。また、コズィラ教授のご案内で、ワルシャワ大学の図書館と茶室を見学しました。ワルシャワ大学日本学科はポーランドでもっとも長い日本学の伝統をもつ学科で、今回のワークショップはGPJSの未来にとっても記念すべき交流の一日となりました。この交流をきっかけに、ワルシャワ大学は支倉リーグに加わりました。（横溝博）



第5回東北日本学国際カンファランス

2023年12月9日（土）・10日（日）東北大学

総合企画：黒岩卓（東北大学准教授/GPJS副プログラム長）

国内外から各領域で活躍される研究者を招き、1日目にはメインセッションと4つの分科会が開催されました。2日目には学生セッションが行われました。修士と博士の各課程を終えようとするプログラム生らが研鑽の成果を発表し、招待講演者を含む教員らからの質問やコメントを受けました。修士課程の中でとくに優れた発表に与えられる「支倉賞」は、今年は加藤志織さんに贈られました。（黒岩卓）

メインセッション「魂と共感」

司会：長岡龍作（東北大学教授/GPJS）

登壇：佐藤弘夫（東北大学名誉教授/GPJS特任教授）

林淳（愛知学院大学教授）

ガイタニディス・ヤニス（千葉大学准教授）

本セッションは、世界の諸問題に対して人文学がどのように貢献し得るかというGPJSの本質的な目的を検討するために、とくに宗教の果たす役割に関する3つの基調講演が行われ、講演者らと聴衆との間で意見交換が行われました。佐藤教授は、死者供養のあり方から、日本人が古来から現代に至るまでいかに他者との関係を築き調和を図りながら生きようとしてきたかを例証しました。続いて林教授は、日本人が仏教を享受するなかで、目に見えない（unseen）ものを見ようとした試みについて須弥山図を手がかりとして検討しました。ガイタニディス准教授からは、世界と宗教の関係に関して分野横断的に知見を共有する際の方法論の問題が提起されました。3つの講演は、以下のGPJSのYouTubeチャンネルから視聴できます。（木山幸子）

Part 1：挨拶、佐藤教授講演

<https://www.youtube.com/watch?v=t-TJXgsYN8E&t=2991s>

Part 2：林教授講演

<https://www.youtube.com/watch?v=xv4raYDOjjo&t=0s>

Part 3：ガイタニディス准教授講演、討論

<https://www.youtube.com/watch?v=OFUTwD1Hlek&t=0s>

分科会1「ルターが東へ：近代中国と日本における語りの再生」

企画：オリオン・クラウタウ（東北大学准教授/GPJS）

司会：星野靖二（國學院大學教授）

登壇：オリオン・クラウタウ（東北大学准教授/GPJS）

呉佩遥（中国、上海師範大学専任講師）

ジェームス・ウングレアヌ（アメリカ、ストーニー・ブルック・スクール）

本分科会は、ルターの宗教改革の語り方が19世紀後半～20世紀初頭の東アジアにどのように影響したかが議論されました。クラウタウ准教授は、日本での「新仏教」の形成を、北島道龍などの人物がルター改革をどう受け止めたかを通して検討しました。呉佩遥氏は、康有為の孔教改革運動とその国家救済の物語への貢献に焦点を当てました。続いてウングレアヌ氏のコメントで、宗教改革のグローバルな影響と東アジアでの独自の受容が指摘され、本課題のトランスナショナルな性格が強調されました。（オリオン・クラウタウ）



分科会2「共感と言語」

企画・司会：木山幸子（東北大学准教授/GPJS）
 登壇：岩淵俊樹（浜松医科大学特任講師）
 木山幸子（東北大学准教授/GPJS）
 熊可欣（東北大学助教）
 談リウイ（東北大学博士後期課程/GPJSプログラム生）
 コメント：小泉政利（東北大学教授）

本分科会はハイブリッドで行われ、言語コミュニケーションに求められる共感の認知神経基盤に関わる研究知見やその方法論が議論されました。岩淵氏の基調講演では、共感能力の発達過程、個人差、文化差について最新の知見が幅広く紹介されました。続く3つの発表では、アジア言語に多く見られる終助詞、詩、間接発話の理解における共感能力の役割を検証した実験結果が報告され、共感能力が多様性に富む社会における相互理解に不可欠であることが共有されました。（木山幸子）

分科会3「知識の土着」

企画・司会：鷲谷洋輔（東北大学准教授/GPJS）
 登壇：ビヴァン・エルーティ（ニュージーランド、マッセイ大学教授）
 許佩賢（台湾、農業部林業試験所）
 川崎良太（NHK福岡放送局）

「Indigeneity」をテーマとした本分科会は、その日本語訳の一つ（「土着」）が土地に根差した意味合いを持つことを念頭に企画されました。マオリの体系的な知と方法論、台湾における先住民と観光施策、ニュージーランドにおいて先住民と土地をめぐって交錯するアイデンティティの問題、という三者それぞれの報告は、どれも「Indigeneity」を考えていく新たな視角を提起するものでした。最後に、日本のアカデミアをめぐる状況のなかで「Indigeneity」を取り上げる学術的な意義や可能性について参加者を交えた議論が交わされました。（鷲谷洋輔）



分科会4「生活水準と家族の歴史学」

企画：結城武延（東北大学准教授/GPJS）
 司会：酒井一輔（東北大学准教授）
 登壇：張婷婷（東北大学助教）
 公文讓（ノルウェー経済大学博士研究員）
 高橋美由紀（立正大学教授）黒須里美（麗澤大学教授）
 長岡篤（千葉商科大学助教）
 平井晶子（神戸大学教授）

本分科会はハイブリッドで開催され、4つの報告が行われました。いずれも近世期から明治期までという時代設定の下で、宗門人別帳や雇用契約書などの個人レベルの情報が記された一次史料を用いて、当時の人口動態、生活水準、日本社会の基本構造である「家」の実態を明らかにしました。他方で、各報告は歴史人口学、歴史社会学、経済史や計量経済学といった多様な分析手法が展開されたため、それぞれの報告について異なる視点で論点が提示されました。幅広い論点の中でお互いの共通見解となったのは、一次史料であるがゆえに提示された事実の一般化には慎重になるべきであり、多くの実証分析の積み重ねにより徐々に全体像が示されるという点でした。（結城武延）



🌀 第8回支倉シンポジウム

「身体化された談話、身体化された実践：日本におけるテキスト、媒体、言明としての身体」

2024年1月25日（木）・26日（金）ローマ大学ラ・サピエンツァ（イタリア）

マチルダ・マストラランジェロ教授、ステファノ・ロマンヨール助教授らサピエンツァ大学東洋学研究科教員らの主催、支倉リーグ北米重要拠点のプリティッシュ・コロンビア大学（カナダ）と東北大学GPJSの共催として、8回目となる支倉シンポジウムが開催されました。日本学に関わる研究者が世界中から参集し、歴史が身体化された都市ともいえるローマの地で、日本学と身体化の関係について活発な議論・交流が行われました。

東北大学からは、GPJS前プログラム長の尾崎彰宏名誉教授をはじめとして、教職員（芳賀満教授、安達宏昭教授、横溝博教授、クリストファー・クレイグ准教授、木山幸子准教授、ロレンツォ・マリヌッチ准教授、和泉愛玲事務局員）と大学院生ら（エレナ・ファブレッティ、槇島千仁、鈴木あすみ、丁舒文）総勢12名が現地に赴き、研究発表や司会を務めました。



本シンポジウムは、人間の身体が一実体としてまたは想像上で、個人主義的であれ集団主義的であれ一世界とどのように関わっているかを探求することを趣旨としていました。文学、言語学、人類学、歴史、哲学、美術など幅広い領域の意欲的な試みが報告され、それぞれの参加者がそれぞれの視点から「身体化」という共通項を再考しました。（木山幸子）



GPJS プログラム生インタビュー

第2回

鏡耀子さん (GPJS 第1期生)

東北大学大学院文学研究科日本語学専攻分野・博士後期課程修了
ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア) とのダブルディグリー授与



Q1. 鏡さんはGPJS1期生ですが、なぜGPJSに志願しようと思ったのでしょうか。また、実際にGPJSのプログラム生となってみてどうでしたでしょうか。

一せっかく東北大学に来たのだから、その利点を最大限に活かして国や学問の境界を越えた学びを得たいと考えており、GPJSではまさにそれができると考えたためです。人文学・社会科学系では初となる国際共同大学院プログラムで、新しい試みであるという点にも惹かれました。プログラム生となったばかりの頃は、自分の研究を他の分野の人に分かりやすく伝えるということや、自分の研究を広い視野で捉えて社会の課題に結びつけるということに非常に苦勞し、自分には無謀な挑戦だったのではないかと悩んでばかりいました。ですが国際学会などで他の方の手法を見つつあれこれ考えて試したところ、自分なりに少しずつそういったことができるようになってきたと感じます。



Q2. イタリアのヴェネツィア・カフォスカリ大学へ1年間留学されましたが、なぜこの大学を選んだのでしょうか。またここで活動を振り返ってどうでしたでしょうか。

一私は日本語教育への応用を視野に入れた日本語学研究を目指しており、留学先では現地の日本語教育を学びたいと考えていました。そこで海外の日本語教育について調べていた際、「ヨーロッパ日本語教師会」の当時の会長の方がヴェネツィア・カフォスカリ大学の先生だと知り、そのご研究に感銘を受けて留学を決めました。留学中は私自身もイタリア語を学ぶ学習者となる傍ら、日本語の授業や日本語教育のゼミに参加したり、研究のための調査を行ったりと、大変充実した時間を過ごさせていただきました。現地の先生方や学生の方々とも日々交流することができ、そこで得られた研究内容に関する指摘から何気ない会話に至るまでのあらゆることが良い刺激となって、今の研究に対する姿勢に繋がっていると感じます。

Q3. 東北大学とカフォスカリのダブルディグリーを達成されようとしていますが、実現までに困難があったと思います。それはどのようなことで、そしてどのように克服しましたか。

一カフォスカリで学ぶ中で自分の考えが変化し、留学当初想定していた研究内容からずれが生じて、何をすべきか分からなくなってしまった時期がありました。研究が進まないまま時間だけが過ぎていく感覚が苦しかったです。「木を見て森を見ず」ということわざがありますが、私の場合、森を見すぎて挫折してしまうことが多く、このときもそうでした。全体像をいきなり完璧なものに仕上げようとして挫折し、目の前のことすらもできなくなってしまうという状態です。とりあえず目の前のできることからやってみようと考え、論文を読んだりアイデアを書き出したりしているうちに、気づけば脱することができていました。ある程度の見通しを持っておくことは大切ですが、いきなり森にこだわりすぎず、まずは目の前の木をしっかり植えよう意識することが私には必要なのだと学びました。

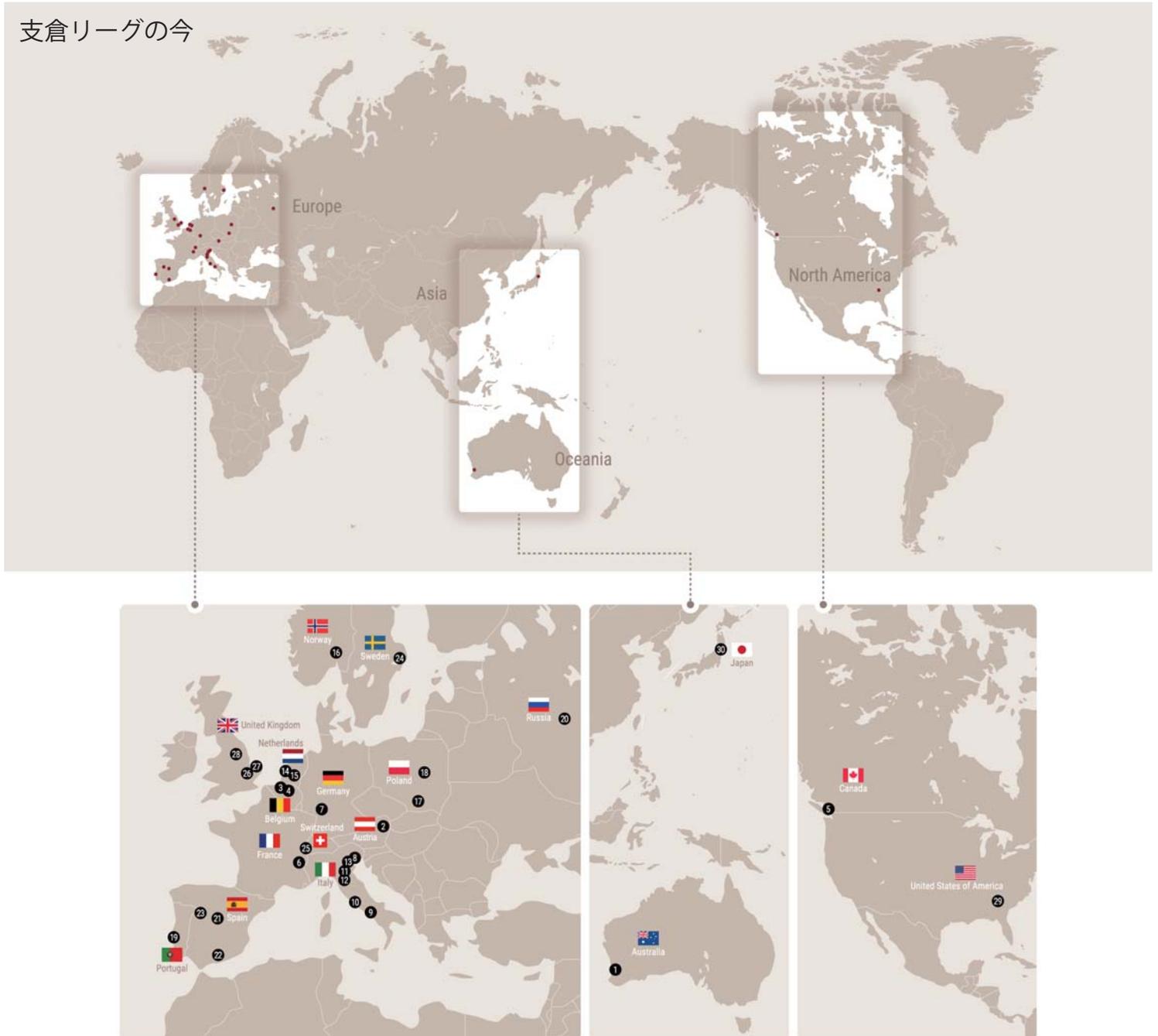
Q4. 5年間を振り返って、GPJSの良さはどのようなところにあるといえますか。それは、今後のご自分の人生にどのように活かされるとお考えですか。

一物事を多角的に見られるようになるということに、GPJSの一番の良さがあると思います。国際学会で様々な研究に触れたり、世界中の情報にアクセスするための英語力を鍛えたり、他分野の先生方や学生の方々と交流したりするといった機会を多く頂いたことで、自分の視野を広げ、様々な視点から課題にアプローチする力を身に付けることができました。それは、研究者としてはもちろん、一人間として現代社会を生きる上で必要な力だと思います。世の中の多くの物事は、絶対的な是非や善悪を問うことが極めて難しく、様々な立場や状況に鑑みる姿勢が求められるものと考えています。GPJSでの学びは、今後研究や教育に従事する上でも、それ以外のあらゆる面でも、非常に有益なものであると確信しています。

ありがとうございました！粘り強い努力がダブルディグリーとして実ったこと、本当におめでとうございます。



支倉リーグの今



参加大学 (2024年3月現在)

- | | | |
|----------------------------|---------------------|--------------------------|
| 1. カーティン大学 (オーストラリア) | 11. ボローニャ大学 (イタリア) | 21. マドリード・アウトノマ大学 (スペイン) |
| 2. ウィーン大学 (オーストリア) | 12. フィレンツェ大学 (イタリア) | 22. グラナダ大学 (スペイン) |
| 3. ヘント大学 (ベルギー) | 13. パドヴァ大学 (イタリア) | 23. サラマンカ大学 (スペイン) |
| 4. ルーヴァン・カトリック大学 (ベルギー) | 14. ライデン大学 (オランダ) | 24. スtockホルム大学 (スウェーデン) |
| 5. プリティッシュコロンビア大学 (カナダ) | 15. ユトレヒト大学 (オランダ) | 25. ローザンヌ大学 (スイス) |
| 6. グルノーブル・アルプ大学 (フランス) | 16. オスロ大学 (ノルウェー) | 26. ケンブリッジ大学 (イギリス) |
| 7. ハイデルベルク大学 (ドイツ) | 17. ヤギェウォ大学 (ポーランド) | 27. イーストアングリア大学 (イギリス) |
| 8. ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学 (イタリア) | 18. ワルシャワ大学 (ポーランド) | 28. シェフィールド大学 (イギリス) |
| 9. ナポリ東洋大学 (イタリア) | 19. リスボン新大学 (ポルトガル) | 29. ジョージア大学 (アメリカ合衆国) |
| 10. ローマ大学ラ・サピエンツァ (イタリア) | 20. モスクワ国立大学 (ロシア) | 30. 東北大学 (日本) |

編集後記：第4号では、コロナ禍も落ち着き、マスクを外して対面の交流が再開した活況をお伝えすることができたのではないかと思います。パンデミックを乗り越え、支倉サミットを経て支倉リーグ充実期を迎えようとしている今、設立から草創期の活動を支えてくださった方々への感謝の思いを新たにしています。次号からは、世界に広がる支倉リーグ参加大学の研究者の研究活動や書籍等成果を紹介していきたいと考えています。自薦他薦問わず情報をお寄せいただけますようお願いしております。(木山幸子准教授/GPJS広報担当)

東北大学
日本学国際共同大学院

事務局

980-8576 仙台市青葉区川内 27-1

e-mail: gpjs@grp.tohoku.ac.jp



TOHOKU
UNIVERSITY